

AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第22号

# 空中回廊

この企画展は近世絵画再発見 [木村定三コレクションの江戸絵画—小世界を愉しむ—]  
/会員のひろば/講座ダイジェスト/愛知県美術館コレクションから 一深く知ると、  
もっと見えてくる [藤井達吉コレクション]/友の会活動紹介/事務局だより



○この企画展は近世絵画再発見○

## 木村定三コレクションの江戸絵画 ―小世界を愉しむ―

2006年3月10日（金）から5月21日（日）まで開催

### 江戸絵画の魅力

今回は江戸初期から後期までの、約120点（内、重要文化財6点）の絵画作品で構成される展覧会です。江戸時代の絵画といえば、円山応挙や尾形光琳の作品に見られるような華麗なもの、また武家文化の要請による豪壮なイメージのものが思い浮かびます。

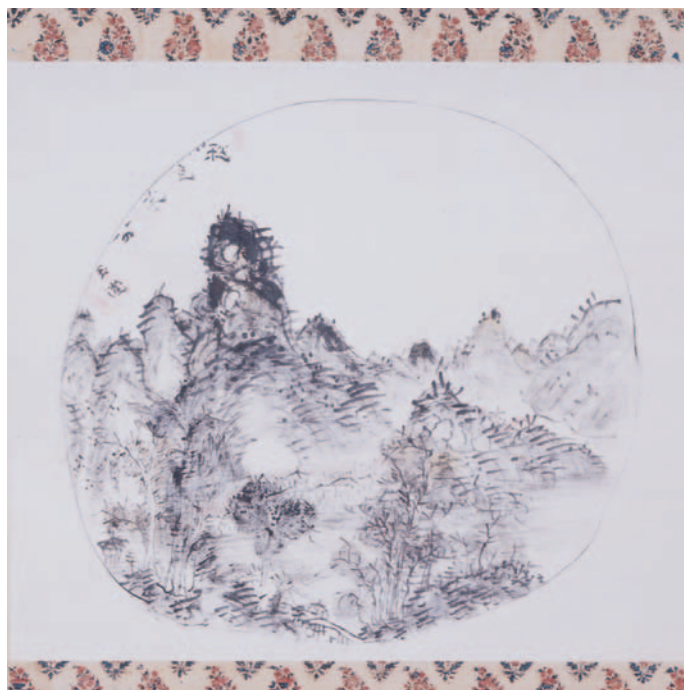
しかし、江戸時代は、そのようなイメージとは異なる、人々の親密な生活空間のなかで愉しまれていた、遊び心あふれる絵画作品が多く描かれた時代でもありました。友人や家族と過ごす生活の折々で、その場にふさわしい絵画を鑑賞し、ひとときをその小世界にひたって愉しんだのです。茶の席に代表されるような小さな空間を飾る閑雅な、洗練された作品の数々は、多くの人々の感性を刺激し、対話や心の交流を生み出したことでしょう。大半が初公開となる今回の展覧会では、そのような江戸時代絵画のもつ親しみやすさと、それでいて奥の深い魅力を余すところなく伝えてくれます。

### 蕪村・玉堂から若冲・蘆雪まで

まずは重要文化財にも指定されている与謝蕪村や浦上玉堂の作品からご紹介しましょう。俳人にして日本の文人画の大成者、与謝蕪村は、池大雅との連作《十便十宜図》がよく知られて

いますが、今回展示される《富嶽列松図》も蕪村の傑作のひとつです。横に大きく広がる画面の、松並木の上に聳える富士山の偉容と深閑とした空気感の見事な調和は、見るものを捉えて離しません。

川端康成がこよなく愛した江戸後期の画家、浦上玉堂の作品は9点（5点は重要文化財）が展



重文 浦上玉堂《秋色半分図》1818年

示されます。なかでも、川端自身が所蔵していたことでも知られる名品《東雲篩雪図》に勝るとも劣らぬ美しい作品《山紅於染図》は必見です。この作品は、先年の『自然をめぐる千年の旅』でも展示され、国宝級の作品が並ぶ中でもひととき印象深い作品としてご記憶の方も多いのではないかと思います。

今回は、江戸期の絵画の文脈であらためてその魅力を捉えなおす良い機会になるでしょう。他の8点も、玉堂の画業を示す貴重な作品で、写真の《秋色半分図》などは、江戸時代に絵画がどのように愉しまれていたかを髣髴とさせる佳品ではないでしょうか。

この他にも、奇想の画家として近年人気の伊藤若冲、曾我蕭白の作品、応挙の弟子である長澤蘆雪や、江戸の狩野探幽、英一蝶、円山四条派の呉春の作品などが展示される予定です。また、写真の歌川豊春《遊女図》のような色鮮やかな作品もあり、江戸絵画の華やぎも伝えてくれます。



渡辺清《源氏物語図》1858年

#### 江戸・名古屋・上方・博多の絵画文化

今回の展覧会の最大の特徴は、多様な画家の作品を、江戸、名古屋、上方（京都・大坂）や博多の各地域ごとに大別して展示することにあります。これまで、流派や時代で分類されて展示されることの多かった近世絵画ですが、今回の展示で、地域それぞれの特徴や好みをじかに感じ取ることができそうです。たとえば名古屋出身で、京都で復古大和絵派を開いた田中訥言は、名古屋でも復古大和絵を広めることとなります。写真《源氏物語図》は訥言の弟子、渡辺清の作品です。他にも文人画で中林竹洞、山本梅逸などの名古屋出身の画家が紹介されるほか、名古屋で活動した画家の作品がまとめて展示されるなど、あまり知る機会の多くない近世絵画の地

域性を理解できる展示になっていますので、江戸、名古屋、上方、博多それぞれの文化圏がはぐくんだ独自性とその交流の様子をぜひ発見してください。

#### 木村定三コレクションと近世絵画

なおこの展覧会は、名古屋の著名な蒐集家、木村定三氏の寄贈による「木村定三コレクション」のなかでも大きなまとまりをなす江戸絵画群をはじめ一堂に公開するものです。『木村定三コレクションによる熊谷守一展』に続く本展覧会は、希代のコレクターとなった木村定三氏の近世絵画への愛情と洗練された鑑賞眼を垣間見せてくれるものでもあります。木村定三氏は、茶道にも通じ、優れた陶磁器のコレクターでもありました。近世絵画のコレクションは、自らの茶席を飾り、客人と共に小世界を愉しむためのものでもあったようで

す。ちなみに、木村定三氏の陶磁器コレクションが4月8日（土）から6月18日（日）まで愛知県陶磁資料館で展示されます。今回の『江戸絵画展』とあわせてぜひおでかけください。



歌川豊春《遊女図》18世紀後半

※記事は本展覧会を企画された馬淵学芸員へのインタビューをもとに構成しました。

（文責：三木）

## ○会員のひろば○

# 美術館サポート活動 / 夜のカフェテラス 友の会交流鑑賞会 三重県立美術館

### ◎ゴッホ展期間中のサポート活動

ゴッホ展の人気の高い為、美術館のイベントも多く、友の会も急遽サポートをすることになりました。簡単ですが活動報告をさせていただきます。

#### 【視覚障害者鑑賞会】(参加者29名/サポート8名)

ゴッホ展ということで特に参加者が多く、今回はYWCAのボランティアだけでは困難でしたので会員もサポートしました。一対一で付き添い、絵の説明をし、凸凹のある紙面を指先で触れて筆致を体感していただきました。大変難しいと思いましたが、「あのゴッホの絵を鑑賞できてよかった。」と喜んでくださったので会員一同ほっとしました。

#### 【子供鑑賞会】(参加者182名/サポート延べ68名)

静岡、岐阜からの参加者も含め、多くの小中学生の申込みがありました。館内館外とも大変混雑しましたので、10回の鑑賞会を毎回6~7名の会員で、受付迄の誘導→受付→会場内での誘導をしました。子供達が2時間もの長い間熱心に鑑賞していた姿が印象的で、いかに人気があるかを実感しました。

#### 【親子ワークショップ】(参加者74名/サポート3名)

親子でデザインを考え好きな材料でカレンダーを作る楽しいワークショップでした。サポート内容は材料を管理し渡すことだけでなく、励ましの言葉がけも欠かせないものでした。皆さんが満足してお帰りになりましたのでまた企画されるといいですね。

#### 【聞き取りアンケート】(サポート9名)

「愛知県美術館は初めて」のお客様対象に、多くの貴重なご意見を戴きました。さすがゴッホ展。人波に酔いました。  
(平松)



### ◎美術館サポート活動報告 (小物製作)

友の会のサポート活動が始まって2年余り、私達は「小物製作」を中心に活動に参加してきました。

当初は手探り状態でしたが、保存担当の長屋学芸員ご依頼のもと、美術品の保存や展示に役立つ小物、彫刻のカバーや枕、掛軸の筒、重し、ふくさ、紐等を製作してきました。絹の古い着物を解いたり、洗

浄されたものを、工夫し、絹の手触りを感じながら手縫いで小物作りに励んでいます。展示作品の台として「ふくさ」が使われたり、試行錯誤して完成した「重し」が美術館の収蔵庫で役立っている様子を拝見し、この活動に参加できたことを感謝しています。活動日を自分達で「お針子さんの日」と呼んで楽しみにしています。手仕事が好きな方のご参加をお待ちしています。ご一緒に如何ですか。

(小物製作担当理事 武藤和子)

#### ○小物製作サポート活動案内○

時期 毎月第2・4水曜日 10:00~16:00

ご都合が良い時間帯に参加して頂けます。

場所 美術館学芸員室内 友の会コーナー

\*サポート活動に興味を持たれた方は、友の会事務局までご連絡ください。お待ちしております。\*



### ◎友の会交流鑑賞会（三重県立美術館）

鈴鹿の山なみを右手に眺めながら、津までの約1時間、友の会の交流鑑賞会に三重県立美術館の「安井曾太郎展」へ出掛けたのは、初秋の気配の漂いだした9月2日でした。

2004年秋、愛知・岐阜・三重 三県立美術館協同企画が三重県立美術館で催されました。各館の館長によるシンポジウムも催され、近隣の美術館がこのように連帯するのは素晴らしいことだと思いました。そして友の会同士もこれからはお互いの交流を持ちたいものとその時思ったのでした。その後、愛知県美術館の特別展「自然をめぐる千年の旅」に三重の友の会の皆さんが鑑賞にお出掛け下さいました。

そしてこの度「安井曾太郎展」に私たち友の会が



曾太郎が描いた「鯛」と「桃」にちなんだ明石の鯛のメインディッシュと桃のデザートを楽しむ会員

お招きを受けました。昼食にはレストラン「ボン・ヴィヴァン」の安井曾太郎にちなんだ特別メニューをご用意いただき、講堂では白石館長・奥岡理事長がご挨拶下さいました。また田中学芸員にソフトな語り口で安井曾太郎についてのお話をいただき、会場に入りました。

こうして一日私たち39名の参加者は、三重県立美術館で安井曾太郎の世界に浸ることができました。次年度にはまた三重県立美術館友の会の皆さんをこちらにお招きしたいと思っております。

(友の会会長 宮崎玲子)

### ◎友の会・美術館共催イベント「夜のカフェテラス」

8月の毎週金曜日（全4回）、10階屋外庭園で「夜のカフェテラス」が開催されました。これは、10階のレストラン「華」に夜間営業をお願いし、隣の屋外庭園にテラスを設置、お酒や軽食をいただくというものです。会場には、歌手の西みほさん、ジャ



ズピアニストの太田邦夫さんをお迎えして生演奏も楽しみました。

実はこの企画、ゴッホ展のチラシに載っていた《夜のカフェテラス》を見た友の会会員が、「愛知県美術館にもこんなのがあったらいいね。」と冗談で言ったのがきっかけです。じゃあやってみよう、と話が進み、友の会も会場設営（機材の搬入・打ち水）や宣伝に協力することで実現しました。

初回こそ夕立に降られ、あわてて屋内に避難するというハプニングもありましたが、2回目以降は天候にも恵まれ、打ち水の効果もあって意外と涼しく、とても良い雰囲気でした。回を重ねるごとにお客さまが増え、入りきれない方をお断りしなければならぬほどの盛況でした。

(森)

## 友の会講座 「ラスコーの洞窟を訪ねて」

フランス政府の許可は思いのほか早くおり、指定された見学の日までひと月もなかった。急ぎ、目当てのラスコーの洞窟に加えて、旧石器時代の遺跡をめぐる一週間の旅程を組み、パリに飛んだ。1999年7月のことである。計画を立てられた、いまは亡き彫刻家の若林奮さんは、この企てを密かに、「永遠の現在をもとめて」と名づけていた。

ラスコーの洞窟は、劣化を防ぐために閉鎖されて久しい。1970年代のはじめフランスにいた若林さんは、フランス中南部からスペインにかけて、洞窟画の残る旧石器時代の遺跡を訪ねまわっている。そのときすでに閉鎖されていたラスコーへの思いは、折に触れ話題に上ったが、その思いの深さを、後に私はあらためて知った。最後となった病床で推敲が加えられていた30年前のノートは、『若林奮ノート』として2004年に上梓されたが、遺稿集となってしまったこの本の前半は「旧石器時代の美術に関する覚え書」にあてられている。

私たちはフランス南西部ドルドーニュ県の中心地ペリグーで車を借りた。ラスコーをめざしてヴェゼレ渓谷の周辺をめぐったあと、ピレネー山麓ニオーの洞窟まで南下し、山脈沿いに西へ走って、石筍の地下宮殿にたくさんの手形（ネガティブ・ハンド）が残るガルガスの洞窟を訪ね、ボルドーで車を降りるまで、3日間に1000キロ近くを駆け抜けていた。

帰路、ボルドーで特急列車に乗り込んだ一行は、誰も自分が見たものについて語ろうとはしなかった。「永遠の現在」をもとめた旅の終わりは、いつもの倦怠感とは違うものであった。頭の中は、洞窟の中で身体が感じたことや、周辺の風景の断片でいっぱいであるのに、その中心にある動物たちの画像については、何を見たのかが覚束なくて語れなかったのである。ことばを交わすのが疎ましく、刈り入れの終わったばかりの田野の起伏が、麦秋の暮れぬ夕刻の車窓を流れいくのを、ただ眺めていた。そして、誰もが再訪の必要を思っていた。

私たちは何を見たのだろうか。洞窟の闇の中で何

を見ることができたのだろうか。「壁」と言うけれど、洞窟の空間には、実のところ床も壁も天井もないのである。床・壁・天井に分節され、構築された無機質な空間に慣れた私たちには、すべてが渾然一体の闇の空間は、手燭のわずかの光の揺らぎに、ひと塊の生命体のように無気味に蠢き、身に迫ってくる。パニック状態にある身体にとって、光を求めるばかりの現代人の視覚は、何の力にもならないことを思い知らされた。

編集者から何か図版をと言われたけれど、私には、光の中で見た現在の洞窟の入口の写真しか提供できない。洞窟の中で見たものの記憶は、すでに写真図版に侵蝕されて怪しいものだが、私がそこで見たものは、十分な光のもとで見られ、切り取られて私たちの手元に届けられた写真映像とは、全く別のものである、そのことだけは確かである。

旧石器時代の人たちは、なぜあのような光の差さぬ場所に描いたのであろうか。それも動物ばかりを、しかも横向きに。ようやく今にして、それは、外の光の差し込まぬ場所にこそ描かれるもの、そうした場所でこそ見ることのできたものと了解される。現代人である私の力なき視覚の、それでもかすかにつながる遠い人類



ラスコー洞窟入口

の記憶をたぐれば、闇の空間が身に迫るなかで、「壁」から「天井」にかけて横向きに描かれた5メートルはあるかと思えるウシでさえ、動物たちは決してこちらに迫ってくることはなかったことを、時を経たいま、「イメージ」の意味にかかわる体験として実感する。

(愛知県美術館長 市川政憲)

○愛知県美術館コレクションから一深く知ると、もっとみえてくる○

## 藤井達吉コレクション



《出現：日の出／富士》1942年

藤井達吉（1881～1964）は、大正時代に工芸の近代化をめざし前衛的な活動を展開した作家でした。藤井は、岸田劉生や高村光太郎らが結成したフェウザン会に参加したり、国民美術協会の創立会員として活躍しました。そして、高村豊周らとの装飾美術協会の結成や工芸集団无型の結成にも携わり、また、津田青楓らとの官展への工芸部門の設置運動や、全国的なブームとなった家庭手芸運動の中心人物として大正時代の工芸界の歩みの最先端をたえずリードしてきました。まさに大正工芸界の前衛の旗手というべき存在でした。

しかし、昭和に入ると一転して、それまでの美術界における積極的な活動から身を引き、日本の伝統工芸の調査や後進の育成に力を注ぐようになります。そして昭和20年に愛知県の小原村へ疎開して以降、83歳の生涯を終えるまで、ふたたび東京の地に帰ることなく、愛知県内の郷里・碧南や岡崎そして静岡の沼津などの各地を転々とし、藤井を慕う人々とともに生きる人生を過ごしました。愛知に戻ってからの後半生は漂泊の時代とも呼ばれています。

さて、藤井の創作活動は七宝、金工、木工、漆工、染織、陶磁などの工芸部門にとどまらず、絵画、図案、書までを包括する幅広い分野に及んでいます。大正時代、藤井は工芸を単に仕上げの巧みさを誇るものではなく、作家の内面性が発揮された独創的な作品をつくるべきだと主張し創作活動を展開しました。その意識の背景としては生活の芸術化というも

のがあったと思われます。藤井自身のその意識がどの程度の認識を持っていたのかは現段階においても明確な答えが出せませんが、ただ藤井が主張した「工芸は総合芸術である」という言葉のなかに解答が潜んでいるのではと考えます。

今回表紙に使用された《桜図》（屏風）は、藤井が一時期院展に出品していた頃の作品です。工芸の分野でキーワードとなる「装飾性」という視点からみれば、藤井が日本画制作を手がけてもなんら違和感のあるものではありません。画面前面に桜花を、そして、その背景に樹木を描いており、大正時代末期の院展の傾向を感じさせるものがあります。さらに、銀箔を貼った表装の部分も藤井の創意がほどこされたものです。画面と表装の部分との調和が醸し出す美しさも藤井作品の魅力といえるでしょう。

本編掲載の《出現：日の出／富士》は、戦時中、照宮成子親王ご成婚祝賀献納屏風（六曲一双）の下絵となったものです。この日の出は真鶴の地での写生をもとに描かれています。ちなみに、藤井作品は陸軍省からの献上となり、海軍省からの献上作品は横山大観が担当していました。

（企画普及課長 木本文平）

### ■学芸員の横顔

木本文平（きもと・ぶんべい）

愛知県美術館企画普及課長

専門は近・現代美術。筧忠治や藤井達吉ら郷土美術の研究に従事。「画業70年のあゆみ杉本健吉」「富岡鉄斎」「前田寛治の芸術」「中村彝の全貌」を担当。現在中日新聞に「杉本健吉物語」を執筆・連載中。1951年愛知県生まれ。趣味は草野球・スキー。





AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

# MEMBERSHIP

## 事務局だより

友の会の事務局を担当することになって5年が過ぎようとしています。今思い返すと、大変なことを簡単にお引き受けしたとすぐにわかり1年目は事務局の仕事をこなすことに精一杯でした。2年目になってやっと美術館との調整や友の会事業の運営を通して友の会の意味を考えるようになりました。3年目は美術館に通うことが楽しくなり、美術館との共催事業も増え、美術館支援活動の新たな方向の模索も始まりました。4年目は友の会が10周年をむかえ、支援活動の一環として美術館サポート事業がはじまり、会員の皆様からのご意見やご要望を直接伺う機会が増えました。そして5年目の昨年は、私事にアクシデントが続き、多くの皆様のお陰でなんとか切り抜けることができました。理事をはじめ会員の方々のご尽力に感謝するとともに、手応えのある会として美術館との関わりを深く感じた1年でした。 (事務局 真野)

### お知らせ

友の会では江戸絵画展開催中に、邦楽の演奏会を開催します。解説は近世芸能文化に詳しい、南山大学教授安田文吉氏です。どうぞお楽しみに。

## 友の会活動紹介



### ◎特別鑑賞会 (50年の歩み展) ◎▶

展示された作品の多さに皆ビックリ。学芸員さんの苦労が見られ、それぞれの作品の収集された時代背景等のギャラリートークにも興味深いものがありました。



### ◎特別鑑賞会 (吉原治良展) ◎▶

初めて展覧会の主担当をされた森学芸員は少し緊張気味でしたが、レクチャーとギャラリートークでは落ち着いて最後の作品まで丁寧に対応してくださいました。

### ◀.....◎懇親会◎

イベント担当理事2名(佐久間・森)が中心となって企画し、60名余りの会員が参加されました。予定時間を大幅に過ぎても参加者同士のお話が弾んでいました。



### ◀.....◎移動美術館受付サポート◎

今年度の移動美術館は大口町で開催されました。期間中の3回、愛知県美術館や展覧会についてのアンケート、「美術館50年の歩み」展の広報を行いました。



## これからの企画展のご案内

木村定三コレクションの江戸絵画 -小世界を愉しむ-

3月10日(金) → 5月21日(日)

愛知曼陀羅 -東松照明の原風景-

6月2日(金) → 7月23日(日)

愉しき「家」

8月4日(金) → 10月1日(日)

古代ペルシャ展

10月13日(金) → 12月10日(日)

## 編集後記

日本人の桜好きは今も昔も変わらないようです。藤井達吉の作品を表紙に選んだ理由は、愛知県美術館の誇る藤井コレクションを木村コレクションのように皆さんに広く知って頂きたかったからです。「美術館より」のページには木本課長が興味深い文章を書いて下さいました。これを機に藤井ファンが増えるとうれしいです。

先頃のゴッホ展では空前の入館者数を記録しましたが、海外の作家だけでなく日本の作家、特に地元の作家に対する関心が高まっていくことがこの地方の民度をより高めることに繋がるのではないのでしょうか。海外偏重の嗜好はそろそろ卒業して、日本の美術が誇らしく語られる時代が来てほしいと思います。(折戸)

□編集 水野 愛子/平松 章子/森 健次/伊奈 由希子/湯田 文折戸 祥子/中田 賢/三木 信吾/真野 良子(事務局)

□協力 愛知県美術館企画普及課

□発行 2006年3月

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2

愛知芸術文化センター内

TEL: 052-971-5511 (代) 内線 347

FAX: 052-971-5604

E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

美術館 HP: <http://www-art.aac.pref.aichi.jp>